

「こころ」大人になれなかった先生 石原千秋 著 みすず書房

本の内容

大人になることは、かつては親を超えることでした。ところが、その機会を奪われたのが、ほかならぬ「先生」です。そこに不幸の始まりがありました。「先生」が果たせなかった“父親殺し”の問題を、詳細に追究します。さらに、「先生」「K」「私」をめぐる幾重にも仕掛けられた驚くべき謎を読み解きます。

気鋭の日本近代文学研究者が漱石作品を読み解く。大胆な仮説で小説を読む、至高の悦楽に驚嘆する。

目次

第1回 なぜ見られることが怖いのか

(長すぎた遺書、眼差しへのこだわり、眼差しが怖い ほか)

第2回 いま青年はどこにいるのか

(語る人間の物語、冒頭と末尾の矛盾、隠された感情 ほか)

第3回 静は何を知っていたのか

(「先生」と呼ぶ理由、エリートのための純粋培養システム、高等教育の中の出会い ほか)

著者情報

石原 千秋(イシハラ チアキ)

1955年生まれ。早稲田大学教授。専門は日本近代文学。文学テキストを現代思想の枠組みを使って分析、時代状況ともリンクさせた斬新な読みを展開する。また、「国語」教育について入試国語の読解を通した問題提起を積極的に行っている

「こころ」あらすじ

「上 先生と私」 私は鎌倉の海岸で先生と知り合い、帰京してからもしばしば訪ねたが、先生に対して不思議な感じが消えなかった。奥さんも同様の感じを持っているらしかった。そこで、私は先生に過去を話してくれと頼んだ。私の真面目さを信じた先生は話す約束をした。

「中 両親と私」 大学を卒業して帰省すると、腎臓病で倒れて死を覚悟した父はこの外喜んだ。しかし、先生の遺書を受け取った私は、危篤の父を残して東京へ向かった。

「下 先生と遺書」 両親を亡くした私(先生)は、叔父に遺産を横領され、人間不信に陥って故郷を捨てた。東京の大学に通ううちに下宿の一人娘を愛するようになるが、猜疑心ゆえに告白できない。が、援助するつもりで同居させた友人の K に彼女への

恋を先に告白され、動揺した私は K を出し抜いて結婚を決めてしまった。K は其の事に関して何も言わず自殺した。結婚後も、人間の罪と寂寞とを感じ続けた私は、ついに明治の精神に殉死する決心をした。

(解説)

まず、冒頭に『こころ』のテキストの抜粋が置かれる。約50頁。一度読んでほしいの梗概を知ってはいても、作品の細部にまで眼を向けないのが一般的な読み方だ。ところが、研究者レベルでは、『こころ』の解説をめぐっていくつかの見方があるようだ。

まず、先生の立場から、「視線」をキーワードに、次のように解く。

先生には「K殺し」のモチーフ（動機）があったのではないのでしょうか。だからこそ、すでにお嬢さんの意思を確認していて、必ず勝つとわかっている恋のゲームに、Kを誘いこんだのではなかったのでしょうか。先生はKとの戦いに勝つために恋を必要としたのです。そう考えて、はじめて先生の過剰なまでの罪の意識の理由が理解できるのです。(p. 100)

一方、青年の位置からみれば、「先生の遺書」に込められたメッセージがわかったときに、青年は「先生」を乗り越えることができたと言います。

先生の禁止を破った青年は、象徴的レベルでの「父親殺し」をなしとげ、「大人」になったのです。青年の語る物語に隠されていたのは、「青年が大人になる物語」だったのです。「自由と独立と己れとに充ちた」(上十四)時代にあっては、こういう形でしか、人が一人の「大人」になれなかったのです。(p. 120)

先生・青年とくれば、通常その次は、Kの立場となるが、石原氏は、先生とKの三角関係の中心であった女性に焦点をあてる。この点が、新しい読解になる。

先生の恋人＝妻であった静の立場から、石原氏は『こころ』の意図的なほころびを重要な手がかりとして、静は、Kと先生のすべてを知っていたこと、しかも、知っていながら、青年に一部しか語っていなかったことなどが明らかにされる

『こころ』が、青年の回想で書かれていて、「先生の遺書」を公開する時点では、青年は静と再婚して子供がいることが、解説され、上記の結論に至る。し

かも、青年は遺書を公表するときには、静を批判的に見ることができる位置に成長している、というわけだ。『こころ』が未来小説とすれば、青年と静の新たな愛の葛藤が、この後、展開されるはず。

根拠は、明治45年先生の自殺当時、先生37歳、静29歳、青年26歳。

まず、漱石の『こころ』（新潮文庫）を読み、本書を読めば、眼からウロコが取れるという仕掛けだ。なるほど、こんな見方があったとは。漱石の作品は奥深い。

「こころ」年表「先生」

先生の年齢は、一応明治45年当時37歳と仮定。

- 明治26年（18歳） 両親が病死
- 明治27年（19歳） 秋、東京の高等学校に進学
- 明治28年（20歳） 夏に帰省すると叔父が結婚を勧める
- 明治29年（21歳） 夏帰省、叔父が従妹との結婚を強要、断わる
- 明治30年（22歳） 叔父が遺産を横領していたのを知り、残った遺産を換金して故郷を捨てて上京、大学に進学し、軍人の遺族の下宿に移る、この夏、Kは実家から勘当
- 明治31年（23歳） この年の暮れか翌年のはじめ頃に、Kを下宿に引き取る
- 明治32年（24歳） 夏にKと房州旅行へ出る
- 明治33年（25歳） 二月の中旬頃Kが自殺、六月に大学を卒業、暮れに静と結婚、二、三年後に「奥さん」死去
- 明治41年（33歳） 高等学校生の「私」と鎌倉で知り合う
- 明治45年（37歳） 夏、自決の決意をする

「こころ」年表「K」

明治33年の正月からKの自殺までの推移

- 1月3日前後 歌留多取りをする
- 1月5日前後 「奥さん」と静は市ヶ谷の親類へ年始に行く、Kは静への思いを「先生」に告白する。夜、「先生」はKに声をかけるがKは生返事しかしない。そのまま日が経つ
- 1月中旬頃 大学が始まる。「先生」は突然路上でKに「肉薄」する
- 1月下旬か2月上旬頃 図書館でKに声をかけられ、上野まで歩く。「先生」はKに恋を断念させようとする。Kは「覚悟ならないこともない」と言う。その晩Kに呼び起される。
- 2月中旬頃 「先生」はKを出し抜いて奥さんから静との結婚の承諾を得

る。

2、3日後 奥さんは **K** に婚約を話す。

2日余り後 「先生」は奥さんから、**K** に婚約の話をしたことを聞く。その晩に **K** は自殺。